

ハインドマン研究おぼえがき

都 築 忠 七

本稿は、H. M. Hyndman and British Socialism と題する、私のオックスフォード大学 D. Phil. 論文の概要をまとめたものである。一九五四年六月、私はアメリカ留学をおえて大西洋をわたり、その年の秋から一カ年、オックスフォードで特異な歴史をもつラスキン・カレッジに学び、そこで労働組合出身の學生たちと起居をともにした。當時私は英國でマルクス主義の普及に貢献したハインドマン (Henry Mayers Hyndman, 1842—1921) の生涯に興味をもち、彼の創設した社會民主主義連合 (Social Democratic Federation 略して SDF) の歴史を書くことを思いついた。翌一九五五年十月から論文の完成した一九五九年一月まで、私はオックスフォード大學セント・アントニーズ・カレッジから財政上の援助をうけ、そのうえ、英國労働黨の新進の歴史家ヘンリー・ペリング氏や故 G・D・H・コール教授の研究指導に、したしく接する幸運にめぐまれた。現在英國では、かつてウェップ、コール、ハーアなどがあみならした土臺をさらに掘りかえして、新しい事實を追求し、そこに新しい意味と關係とを見出すための、いくつかの研究がなされていゝ。Henry Pelling, *The Origins of the Labour*

*Party* (London, 1954) は、獨立労働黨 (Independent Labour Party 略して ILP) のくわしき研究に裏づけられており、E. P. Thompson, *William Morris* (London, 1955) は、一時はくすやの手に渡ろうとした社會主義者連盟 (Socialist League) の貴重書類を活用している。そのほか、未發表のものなかに、E. J. Hobsbawm の「エボルトン研究」や Henry Collins の「第一インターナショナル英國部門の研究」などがあり、私もこうした一群の研究者のあとをおって、SDF の歴史を書くこととなった。

さらにペリング氏は、労働運動史の分野に、いわゆる「傳記的方法」を導入しようとし、多数の關係者の傳記的事實をしらべ、それによって動機や起源の複雑さを強調しようとした。私も労働運動につきものの傳説を克服するための方法として、SDF に關係した人々の集團的傳記を書くことの準備を始めたが、實際上の困難もあって、結果は、SDF の創設者ハインドマンの生涯を中心とするものとなった。

ハインドマンは、モリス、ショウ、ハーディなど同時代の社會主義者たちが、研究者にめぐまれます、主として、彼が生存中に發表した二冊の自傳によって、わずかに後世に知られるという状態であった。しかも彼の自傳 (*The Record of an Adventurous Life* (London, 1911); *Further Reminiscences* (London, 1912)) は、個人的な追想記として興味をかゝるものではあつても、正確性に缺け、その取扱う範圍も十分でない。彼の妻ロザリント・トラヴァースの手になる彼の回想記 (R. T.

Hyndman, *The Last Years of H. M. Hyndman* (London, 1923)) は、彼の弟子 F. J. Gould の書いた *Hyndman, Prophet of Socialism* (London, 1928) と同じく、個人崇拜による事實の一方的評價が多い。長年 SDF の事務局長をつとめた H. W. Lee の未完の遺稿に相當の補足をでき上った、いわば SDF の書いた SDF の歴史 (Lee and Archbold, *Social-Democracy in Britain* (London, 1935)) は、黨派的な主張にわざわざいされているだけでなく、依然として未完のままにのこされている。したがって、今まで利用されなかった資料を古い資料に加えて、ハインドマンの生涯と業績とを吟味する企ては、それだけの價值あるもののように思われた。

ハインドマンはさかんな文筆活動に従事した人であって、新聞や雑誌に發表した多數の論文のほか、五十をこえる書物やパンフレットを書いている。さらに、この種類の研究に缺くことのできない第一の資料であるハインドマンの手紙は、現存するものだけでもおびただしい數にのぼり、しかもそれらは歐米各地に散在している。アムステルダム の國際社會史研究所にあるマルクス、エンゲルス、カウツキーへの手紙、ロンドンの英國政治經濟科學圖書館に保存されているヘレン・テイラー、シドニー・ウェップ、ジョージ・ランズベリへの手紙、大英博物館にあるウィリアム・モリスへの手紙、ニュー・ヨーク公共圖書館の所蔵するヘンリー・ジョージへの手紙、ウイスコンシン州歴史協會およびワシントンの國會圖書館にある數人のアメリカ社會主義者への手紙などのほか、ゲイロード・ウィルシアや

R・W・シートン・ワトスンへの手紙のように、個人の私有に屬するものもある。したがって、私がこうしたハインドマンの手紙に目を通すことができたのも、アメリカ關係の資料をマイクロフィルムにおさめているベリンググ氏の配慮はもとより、關係各個人や圖書館の好意によるところがきわめて大きい。

このような未發表の手紙について重要な資料は新聞雜誌のたぐいであり、私はハインドマンと SDF の研究のために、六十種をこえる社會主義または労働關係の定期刊物を参照した。とくに SDF の機關紙である *Justice* は、一八八四年一月一日から一九二五年一月二二日まで毎週發行された。ロンドンの北郊コレンデルにある新聞圖書館の飾りけのない讀書室に坐って、この四十一年間の SDF と英國の歴史を、この週刊紙を通してかえりみながら、私は私の留學生活のうちの最もめぐまれた時を過していたかもしれない。ハイゲイトに餘生を送るかつてのハインドマンの論敵ゼルダ・カーン・コーツ女史をたずねて、必ずしも英國流でない「テイラー」をともし、キング・ストリートのある地下の圖書室で、SDF に關する幾多の貴重な資料を調べ、さらにヨークシア・モアアに近いウォーキンクリフ伯しゃくの舊邸宅で、ハインドマンの藏書を整理するなど、私のハインドマン研究はそのまゝ私の英國の思い出でもある。

\* \* \*

ヘンリー・メヤーズ・ハインドマンは、一八四二年三月七日ロンドンに生まれた。彼の祖先は、パーバイドオヤデメララな

どカリブ海植民地の砂糖園經營にあたり、奴隷労働の上に巨万の富を築きあげた。だが十九世紀前半、これら西インドの植民者は、すでに没落の運命にあった。砂糖價格の下落にひきつづく一八三三年の奴隷解放、そして自由貿易の到来は、彼らの富と權力とに終止符をうつこととなった。しかしその家族のこうした傳統は、ハインドマンに開拓者精神と「エンバイア」の將來に對する強い關心とを、傳へてくれたように思われる。

ハインドマンが生まれた年には、チャルティスト達が議會に對して國民誓願を行っており、彼はまた少年時代にその指導者のひとりアーネスト・ジョーンズの演説をきいてはいるが、こうした社會の動きから特別な印象をうけることなく、みずからはその家族の保守的政治意見をそのままうけいれて成長した。

ケンブリッジ大學を卒業してまもなく、彼はイタリーを訪れた。その年——一八六六年には、ヴェニスをめぐるイタリーの對オーストリア戦争が発生し、彼はただちにロンドンの保守派夕刊紙ベル・メル・ガゼットの従軍記者となり、ティロルの山あいをぬってガリバルディの軍隊と行動を共にした。歸國後は、ロンドン亡命中のマツツイーニをたずね、リソルジメントの理想主義的な國民主義にふれたが、ハインドマン自身は、むしろ革命を非難し合憲主義をとったカヴールの見解を支持したようである。

一八六九年から約二年間、彼はオーストララシアに遊んで「エンバイア」の實情を視察し、そのあとベル・メル・ガゼットの記者として外交問題を扱うようになった。當時「ベル・メ

ル」はグラドストーンの小英國主義に反對してスエズ運河株の購入にはじまるディズラエリの帝國主義を擁護した。ハインドマン自身も英國とロシアとのいざれが「ユーフラテスの谷から友那海にいたるまで」を制壓するかという政治鬭争を最大の外交問題とみなし、一八七六年のブルガリア人虐殺につづくロシア・トルコの戦争にあたり、英國はロシアの南方進出を阻止するために立ち上るべきであると強く主張したほどである。しかし非ヨーロッパ人に對する彼の態度は同情的であり家父長的でさえあった。スタンレーのアフリカ探險が原住民の犠牲において行われていることを、彼は王立地理學協會に對してくりかえし指摘しており、またインドの飢きんに強い關心をよせ、彼のインド研究はインドの貧困の研究となり、こうした飢きんはすべて「金融的飢きん」であると斷言して、英國によるインドの富の「枯渴」——搾取——を非難した。しかしまもなく彼が英國資本主義の將來に疑いをもつようになったのは、直接にはアメリカにおける彼自身の事業の不成功によるものであった。

一八七四年、彼はアメリカ西部の鑛山經營にのりだし、自らも數回大西洋を渡って、いわゆる「鑛夫のフロンティア」で、一獲千金を夢みるあらゆる階層のアメリカ人と接觸した。しかし彼の事業も七〇年代の世界不況の波にほんろうされ、アメリカの鑛山にも破産するものが續出した。このいわゆる「大不況」と一八八〇年代の社會主義ルネッサンスとの關係については、かなりの議論もあるが、自由貿易下の英國の、世界における經濟上の優位をおびやかすこの不況は、一般の労働者はとに

かく、少くとも中流の階級に大きな影響をあたえ、この階級から新しい帝國主義と社會主義とが同時に生まれ出したことは、注目すべきことであろう。このようにして一八八〇年の夏、ユタ州の鑛山を視察する彼の最後のアメリカ旅行の途中、ハインドマンは、友人からうけとったマルクス資本論第一巻のフランス版を、むさぼるように読みふけていた。

\* \* \*

しかし社會改革とエンバイアとを兩立させようとするハインドマンの試みは、一方では彼をロンドン亡命中のマルクスに近づけ、他方では、隠退して靜かに餘生を送るディズレーリのもとに、彼の足をはこばせた。彼はその最後のユタ州訪問のときも、アメリカだよりをマルクスに送っており、歸國後も手紙や訪問の交換をつづけ、一八八一年三月の民主主義連合 (Democratic Federation) 設立準備の開始まで、マルクスとのあいだに、かなりの交渉があったようである。しかし彼は、マルクスの革命論を消化できず、むしろ合憲的な社會改革というラッサールの考えを支持し、下からの革命と上からの指導とのあいだにある種の妥協を見出して、中流階級の經濟的自由主義に對抗しようとした。

當時の急進的労働者は自由黨の最左翼をかたちづくり、ロンドンにはこうした労働者の各種の政治クラブがさかえていた。ロンドン在住ドイツ人労働者のあいだには、ローズ・ストリート・クラブという社會主義團體が組織され、それには英國人セ

クシオンもあった。たまたまグラドストーン内閣が、アイルランドの土地問題をめぐり、強壓政策を採用したことに對し、急進派の態度は極度に批判的となった。こうした情勢のもとにハインドマンは、自由、保守兩黨の一部の急進派政治家の協力をうけ、またロンドンの労働者クラブの支持を得て、一八八一年六月八日、民主主義連合を創設した。

「連合」の綱領は、土地國有化のほかは、普通選挙をはじめとする一連の政治改革にかぎられていた。「連合」の執行部には、ジョン・ステュワート・ミルの義娘ヘレン・テイラーや、かつてチャーティスト運動に活躍したジェームズ・マレイがいたが、これは「連合」の過去との結びつきを示す若干の例であった。「連合」の創立大會の席上ハインドマンは、「民主主義の教科書」(England for All: The Text-Book of Democracy (London, 1881)) を發表し、資本と労働とを扱うその中の二つの章で、マルクスの剩餘價值理論を紹介しようとした。しかし、多くの英國人がいさぐち漠然とした外國人きらいの感情を刺激することを恐れて、マルクスの名を出さず、「偉大な思想家」に負うことだけをあきらかにした。マルクスがこれをよろこばなかったのは當然であるが、問題はそれだけではなかった。この「民主主義の教科書」は、大陸流のソシアル・デモクラシーの教科書であるよりはむしろ、英國流のトリーイ・デモクラシーのそれであり、平和革命達成のため、指導者階級が「眞の愛國心」をもって指導するように訴えていた。エンゲルスもハインドマンに對して不信の念を表明し、「保守黨あがりの野心家」

と彼を呼んだ。そして一八八三年のマルクスの死後も、ハインドマンとエンゲルスとのあいだの不和はやわらぐことなく、英國における社會主義運動の發展に不幸な曲折をもたらした。

他方、アイルランド土地問題が險悪化したとき、「進歩と貧困」の著者ヘンリー・ジョージが、「土地に對する單一課税」という福音をもって英國を訪れた。ハインドマンも、ジョージと個人的に親しいあいだ柄にあったが、土地問題の解決だけでは不十分であるというジョージ批判を通して、はじめて資本の私有を攻撃する社會主義聲明を行った。そして民主主義連合も、次第に社會主義的性格をあきらかにし、一八八三年六月には、生産手段の國有化を黨の新綱領として採用した。しかしその年出版されたハインドマンの *Historical Basis of Socialism in England* は、英語を國語とする諸國民の共同の利益のうえに社會主義を築くとのべて、著者があくまでナショナルな物の見方の制約のもとにあることを示している。

機關紙 *Justice* の創設とともに、社會主義普及のための「連合」の活動はさらに積極的となり、一八八四年八月、その名を社會民主主義連合 (SDF) とあらためた。しかしすでにこのときまでに、連合——SDFの指導者たちは、左右兩派にわかれて對立していた。右派にはハインドマンのほか、アフガン戰爭に参加したことのある舊軍人のH・H・チャンピオンがいた。左派には、かつてドイツで音楽と哲學を學び、ハインドマンよりも前にドイツ語で資本論を讀んだベルフォート・バックス、近代文明のみにくさをきらって社會主義者となった詩人のウィリ

アム・モリス、マルクスの娘エリノアとその夫エドワード・エイヴリングがいた。そしてハインドマンのナショナルイズムとバックスのコスモポリタニズム、ハインドマンの主張する議會による革命とモリスの提唱する社會革命、ハインドマンとエンゲルスとの相互不信、これらが左右の對立をみちびいた主要な原因であった。一八八四年十二月、ついに左派はSDFから脱退し、翌年早々、モリスを盟主とする社會主義者連盟 (Socialist League) を組織したが、議會政治を輕視したため「連盟」そのものはまもなくアナキストの支配下にはいることとなった。

左派分裂後のSDFは、やがて議會政治にありがちなオポテニズムの傾向をつよめた。ひそかにチャンピオンを通じて、第一インターナショナルと保守黨との兩方に關係した策略の士、モルトマン・パリから資金をうけとり、一八八五年の總選舉に候補者をたてたが惨敗した。「トリー・ゴールド」のスキヤンダルとして知られるこの事件は、SDF内部に新しい分裂をひきおこし、執行部を民主化するための特別措置までとられた。ハインドマンも戰術轉換をよぎなくされ、翌年ロンドン、ウェスト・エンドにくりひろげられた失業者示威運動の成功、警官との衝突などのため、彼みずから、議會活動は社會主義の目的達成にとって二次的にすぎないと宣言し、機關紙 *Justice* の論調も、直接行動を支持するかの印象をあてた。こうしたSDF左翼化の傾向は一時的なものであったが、これに反對し、労働組合と協力して政治活動を行うべきであると主張したのはチャンピオンであり、彼は機械工組合のジョン・バーン

ズヤトム・マンとともにハインドマンに對立し、SDFは第三の危機に直面した。しかしこの危機は、戦術上の意見の相異よりも、むしろチャンピオンとハインドマンとのあいだの個人的あつれきによるものであり、チャンピオンの脱黨後も、SDFは労働組合運動の發展のために多大の貢獻をした。

\* \* \*

ウィリアム・モリスの研究家E・P・タムスンやトム・マンの部分的傳記を書いたドナ・トオは、ハインドマンが、ラッサールの賃銀鐵則やマルクスの貧困増加の理論を機械的に解釋したため、八時間労働制の運動や労働組合の役割を輕視し、革命のスローガンだけに走ったと非難している。しかしハインドマンが暴力による革命を欲しなかつたことはたしかであり、さらには彼はトム・マンより以前に八時間労働制を提唱し、そしておそらくモリスよりも強い關心を労働組合に對して示している。ハインドマンが反對したのは「労働のアリトスクラシー」とよばれる古い型の労働組合であり、彼はこのような労働組合のセクショナリズムが、新機械の導入によってつくり出される新しい産業の状態に不適當であることを、指摘したのにすぎなかつた。

一八八四年の創刊以來 *Justice* 紙は、熟練労働者と不熟練労働者との團結を叫びつづけた。一八八八年ロンドンのマツチ女工のストライキにはじまった最下層労働者の目ざめは、ニュー・ユニオニズムとよばれる不熟練労働者組織化の運動となり、この運動におけるSDFの役割は、今まで評價されてきた

よりもはるかに大きかつた。SDF指導者は、職種のいかにか、わらず、全労働者を組合組織に包含しようという、理想主義的なジェネラル・ユニオンの運動を活發に展開し、ウィル・ソーンのガス労働者組合をはじめ、ハリー・クエルチの労働保護連盟 (Labour Protection League) など、かなりの成功をおさめた。

しかし、一八八八―九〇年の好景氣が終り、スランプが訪れるとともに、労働組合運動は後退し、それに代つて、労働者の政治活動が活發化した。今までSDFの影響力の弱かつたヨーロッパを中心として、一八九三年に獨立労働黨—ILPが結成された。SDF自體もランカシアに勢力を伸張し、バーンレイには最大の支部が設けられ、ハインドマンもこゝから議會に選出されることを望むようになった。黨員數も八〇年代には一千人をこえなかつたが、一八九六年には一万人に達し、ILPを加えると、三万人に及んだ。ILPの社會主義は、宗教的または倫理的感情に支配されることが多く、その指導者はSDFの「階級闘争」をこゝろよしとしなかつたが、地方では兩社會主義グループのあいだに、しばしば、緊密な協力が行われた。

しかし、ケア・ハーディをはじめとするILP指導者は、SDFと合體して單一社會主義政黨を組織することよりも、労働組合と提携して労働黨を組織することに關心をもち、事實、一九〇〇年に成立した労働代表委員會は、一九〇六年の總選挙に著しい成功をおさめて、その名を労働黨とあらためた。はじめSDFは、このいわゆる「社會主義と労働との同盟」に参加し

たが、はやくも一九〇一年、Justice 紙の編集者であり當時ハインドマン以上の影響力をもっていたクエルチの要求により、「同盟」が社会主義的でないという理由のため、これから脱退した。これは、SDFにとっても「同盟」にとっても不幸であった。SDFは、その後さらにセクト的傾向をつよめ、他方労働黨は、自由黨と提携して、自らの自主性を弱めることとなった。

一九〇一年ハインドマンは、SDFの現狀に不満をいだきながら隠退を聲明し、ユーコンヤアシャンティなどの金山經營にのりだした。しかし、それは主として政治資金調達のためであり、一九〇三年にはすでに、チェンバレンの保護貿易運動に反對して全國を遊説し、一九〇六年の總選挙にバーンレイで敗れたが、ひきつづき多彩な政治活動をつづけた。

SDFも、インポビリストとよばれた党内急進分子をとりぞいたあと、國內の社会主義勢力の結集に全力をそそぎ、獨立の社会主義新聞クラリオンの運動をはじめ、IPL 左翼や小數のフェビアン社会主義者、さらには教會社会主義者連盟の一部の協力を得て、一九一一年に英國社会黨 (British Socialist Party、略してBSP) を組織した。この新しい黨は、結成當初四万の黨員を誇ったが、當時の労働不安を背景とした産業別組合主義—シンディカリズムの影響をうけて、脱黨者が續出し、やがてBSPは、SDFの別名にすぎなくなつた。

SDF/BSPは、シンディカリズムとくにトム・マンの創設したシンディカリスト教育連盟が、労働者の政治運動を無視するという理由から、これに反對した。しかし、一九一一年から翌

年にかけて發生した相次ぐ労働争議は、深刻な社会不安をつくり出した。たまたま、リヴァプールの争議鎮壓のために出動した兵士に對し、「射つなかれ」という労働者宣言が配布され、トム・マンをはじめとするその責任者は投獄された。しかしハインドマンは、射つことを止める手段を奪取しないかぎり、射たれてもやむをえないとのべ、政治的力をもとうとしない労働者組織をきびしく批判した。

直接行動に對するハインドマンの反對は、當時の婦人参政權運動にもむけられた。もつともこの場合、その反對の理由は、パンカースト母娘の指導下にあった運動が、制限選挙權を婦人に擴大することを直接の目的とし、いわば「婦人資本家」を政治的に解放する結果となるためであった。SDF/BSPの婦人部指導者モンテフィオーレ夫人は、成人選挙權獲得運動に専心し、ドイツ社会民主黨のクララ・ツェトキンなどと連絡をとって、婦人問題を社会主義的な視野からとり扱った。

このようにハインドマンは、労働不安や婦人参政權問題などの國內問題を處理するにあたって、直接行動をきらったが、國際問題をとり扱うときにはむしろその逆であった。このあたりには彼の社会主義の限界もみられるが、その限界は、當時ヨーロッパの幾多の著名な社会主義指導者の分ちもつものであった。

\* \* \*

同時代の他の多くの急進主義者と同じように、ハインドマンはヨーロッパの外交關係を、自由と専制との對立という見方か

らながめ、英國とフランスとをもって前者を代表させ、ロシアとドイツとを後者に含めた。彼は、この自由と専制との衝突を必然的なものとみなし、ただ各國労働者の國境をこえた團結だけが、こうした衝突をさけるであろうと考えたが、同時にまた、こうした團結が不可能な場合、最後のよりどころは英國の海軍力であると信じた。

一八八〇年代の、労働者インターナショナルの再建をめぐる争いは、國際社會主義者の協力が容易でないことをあきらかにした。再建のイニシャティヴをとったフランス社會主義者は、早くから分裂し、エンゲルスおよびドイツ社會民主黨と密接な連絡をもつ「マルクス派」に對して、かつてアナキズムと關係し今では實際の政治に直接に影響をあたえようとするポール・ブルースが對立し、彼の一派はポシビリストとよばれていた。ハインドマンおよび彼のSDUは、他國の内政不干渉をとなえるポシビリスト派と協力し、マルクス派が劃一的な革命の公式をもつて、インターナショナルに支配的影響をあたえることに反對した。英獨佛三國にわたる兩派の争いは次第に悪化し、一八八九年には、第二インターナショナルの二つの創立大會が同時にパリでひらかれたが、これに對するハインドマンの責任は、マルクス派のだれとも同じように重かった。

エンゲルスの死後、とくに一八九六年のインターナショナル、ロンドン會議における、アナキスト除外のための共同の努力を通して、ハインドマンはウィルヘルム・リーブクネヒトと個人的に親しい關係をむすび、ドイツ社會民主黨機關紙にも投

稿するほどになった。しかし一九〇〇年のリーブクネヒトの死後はとくに、ペーベル、カウツキー、ベルンシュタイン等に對する不信の感情がたかまり、ヨーロッパ最大の社會主義政黨としてインターナショナルに殆んど決定的な影響力をもつドイツ社會民主黨が、實際には社會主義陣營の保守勢力にすぎず、その指導者の多くはインターナショナルであるよりもむしろナショナルリストであることを、くりかえし彼は指摘した。

しかしハインドマン自身、何よりも先ず英國人であった。彼と彼のSDUは、ポリア戦争を金融資本家のための戦いとみて、これに反對したが、この戦争のみじめさがドイツやフランスで非難されるにおよび、彼はチェンバレンにならって、他のヨーロッパ諸國が支那やアフリカでおかした殘虐行爲は、南アフリカにおける英國のそれ以上であるときめつけ、さらに南アフリカの將來は、英人でもポリア人でもなく、黒人に屬すべきであると宣言して、ポリア人のための反戦運動を支持しなかつた。

SDUは、小國の權利をまもるといふ英國自由主義の傳統をうけつぎ、とくにハインドマンは、當時アジアにひろがりつつあったナショナルリズムの風潮を歓迎した。日露戦争にあつて、終始彼は日本を支持し、またロンドンを訪れるインド國民主義者を激勵し、Justice紙その他を通じて、インドの反英闘争に積極的な貢獻をした。彼は帝政ロシアを「反動」の別名とみなすほどであつて、「反動」に對する闘いは、それが外部からの戦争であろうと内部からの革命であろうと、これに熱狂的な聲援を送つた。ロシアにおける一九〇五年の革命の場合もそう

であつて、SDFはロンドン亡命中のロシア社会主義者にたいして援助をおしまなかつた。

しかし當時、ヨーロッパの平和をおびやかすようにみえたものは、ドイツ問題であり、經濟軍事の各方面における英獨間の競争であつた。一九〇五年のモロッコ危機にあたり、ハインドマンはインターナショナル常任委員會が、ヨーロッパ戦争の危機をさけるために、緊急會議をひらくことを提案したが、ドイツ社会民主党はこれに反対した。そのためハインドマンは、インターナショナルが戦争と平和の問題を處理するのに無力であると確信し、彼自身の獨白な立場から、平和に對する「ドイツの脅威」について、そして英海軍を擴充することの必要について、Justice紙だけでなく、ザ・タイムズその他の保守黨系の新聞紙上で、活發な議論を展開した。しかし平和主義のILPはもとより、セオドオ・ロートシュタインとミス・ゼルダ・カーンによつて代表されるSDF/BSPの反戦派は、ハインドマンの海軍論を批判しつづけた。彼らは、ドイツの資本主義よりもまず英國のそれを攻撃し、軍縮の必要をとぎ、ドイツ社会民主党を平和と國際友好の守護神とみなしたことは、ハインドマンの態度と對照的である。一九一二年スイスのバーゼルでひらかれたインターナショナルの大會は、社会主義者の團結について相當の自信を示したが、戦争そのものについては今までと同じく、なんらの具體案をもうち出さなかつた。

一九一三年、SDF創立以來ハインドマンの政治活動に積極的な協力をおしまなかつた彼の妻マチルダ・ハインドマンが死

亡した。翌年彼は女流詩人のロザリンド・トラヴァースと結婚したが、彼の新しい妻は東歐ナショナルイズムの運動に詳しく、彼女との結婚は彼の餘生が社会主義よりもむしろナショナルイズムと密接な關係をもつようになつた理由のひとつであつた。

\* \* \*

一九一四年八月がおとすれた。ハインドマンも、はじめはハーディヤランズベリとともに、戦争停止のための労働者の示威運動に参加したが、八月四日、獨佛兩國の社会黨が戦争支持の態度をきめ、英國も對獨宣戦を行うにおよんで、彼はこの戦争をプロシア軍國主義のための戦いと規定し、積極的な戦争への協力をはじめた。戦争中、労働者の利益を守るために設立された「戦争非常事態労働者全國委員會」で、彼はシドニー・ウェッブらとともに、政府の經濟政策に對する助言を行い、彼の社会主義も實際には、フェビアン流の漸進主義と大差のないことを證明した。一方ILPは、民主管理同盟(Union of Democratic Control)のE・D・モレルと協力して、たゆまない反戦運動をつづけ、BSPもやがて反戦派が多数を占め、一九一六年にはハインドマンとその追従者は脱退して國民社会黨(National Socialist Party、略してNSP)を創設した。

スコットランドにおけるBSP反戦派の闘將はジョン・マクレインであり、一九一七年十月のロシア革命のあと、彼はグラスゴウ駐在のロシア領事に任命されたが、官憲の彈壓によつて健康をそこない、後にはスコットランド獨立運動に關係する

ようになった。他方ハインドマンは、ロシアを後進農業國とみなし、ロシアにおける社會主義尙早論をとなえ、革命に成功したレーニンを「インポピュリスト」、「アナキスト」とよんで非難した。ハインドマンによれば、資本主義の最も進んだ英國が、世界最初の社會主義國となるべきはずであったが、彼のこうした發展段階説の背後には、彼の祖國がいつも人類進歩の第一線に立つことをねがう、「ジョン・ブル第一主義」があった。同時に彼は、英米佛を民主主義國とみなして、これら三國の同盟を提唱し、またこの三國を中心とした社會主義インターナショナルを組織しようと努力した。彼はまた、支那における日本の、そしてアドリア海におけるイタリーの、侵略行爲を非難し、ドイツ軍國主義の復活について警告し、社會主義の豫言者ではなくても、少くとも戦争の豫言者となった。

大戦中彼は、東歐問題専門家R・W・シートン・ワトソンの創設したセルビア協會の會員として活躍し、フィンランドやポーランドのナシヨナリストたちを鼓舞激励し、戦後、夫人とともにチェコスロヴァキアを訪れ、新獨立國に祝福を送った。他方、SDPは、戦後のいわゆる國民解放が、外國資本を、それよりもさらに強欲な國內資本でもっておきかえるにすぎないとみてこれに反対し、國民一民族の問題は、世界を一丸とする共產主義連邦の設立によってのみ解決されると主張した。まもなく同黨は、モスコイ・インターナシヨナルに参加し、一九二〇年に創立された英國共產黨の母體となった。

一方ハインドマンのNSPは、一九二〇年にその名をもとの

SDPとし、その後一九四一年まで労働黨内部の社會主義グループとして存続した。ハインドマン自身は一九二一年十一月二日に八〇歳の高齢で死亡したが、その二週間前まで、社會主義英國のために國內各地を演説してまわった。ハインドマンの死亡は、英國における「社會主義復興」の先驅者であるSDPの多彩な歴史に、實質上の終止符をうつものであった。

ハインドマンの社會主義は、英國の保守的そして國民主義的傳統の上に、いわば接ぎ木されたものであった。そしてそれは商店經營者とマンチェスター學派に對抗して、英國教會と紳士と労働者とが協力するという、チャールズ・キングズリーの線に沿って成長した。ハインドマン自身は無神論者であるのにもかかわらず、彼が國教徒と非國教徒とを區別して、社會主義運動における前者の協力を歓迎したことは興味あることである。

彼は自らを、英國におけるマルクス主義の布教者とみなし、四〇年間、献身的なそして精力的な布教活動をつづけた。彼は最後まで、階級搾取の關係を批判し、階級闘争の事實を信じたが、同時に國民という利益共同體の現實を承認した。列國間の競争が階級の對立をおおいかくそうとした、當時の社會主義のディレンマを、彼は身をもつて経験した。彼の社會主義は「英國マルクス主義」ともよぶことができようが、彼のSDPは、幾多の變遷をへて、最終的には労働黨と共產黨とに解體されて行つた。「社會主義者の團結」の必要は、ハインドマンの時代にもくりかえし強調されたが、現在の英國にとつても同様に切實な課題である。